
幸いな国⑤

< 憐れみ深い人 >

シリーズ～築く～

2010/5/30

心の貧しい人々は、幸いである、

天の国はその人たちのものである。

悲しむ人々は、幸いである、

その人たちは慰められる。

柔和な人々は、幸いである、

その人たちは地を受け継ぐ。

義に飢え渴く人々は、幸いである、

その人たちは満たされる。

憐れみ深い人々は幸いである、

その人たちは憐れみを受ける。

「憐れみ」とは

- 天地創造の神が人間に向けておられる心
 - 「主は憐れみ深い神であり、あなたを見捨てることも滅ぼすことも、…」<申命記4:31>
 - 神の憐れみなしに、人は神と関われない
 - 人間は徹底的に罪深く、汚れているので、神が目を向けることはもちろんのこと、これに関わることや助けることは本来あり得ない！
 - 「主よ思い起こしてください／あなたのとこしえの憐れみと慈しみを。」<詩篇25:6>
-

憐れみを大切にされたイエス

イエスはそこをたち、通りがかりに、マタイという人が収税所に座っているのを見かけて、「わたしに従いなさい」と言われた。彼は立ち上がってイエスに従った。イエスがその家で食事をしておられたときのことである。徴税人や罪人も大勢やって来て、イエスや弟子たちと同席していた。ファリサイ派の人々はこれを見て、弟子たちに、「なぜ、あなたたちの先生は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と言った。イエスはこれを聞いて言われた。「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、行って学びなさい。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」<マタイ9:9~13>

罪人を憐れむことの意味

- 当時のイスラエルの状況
 - ローマ帝国の支配。搾取・蹂躪・弾圧
 - パレスチナはユダヤ人にとっては命
 - この状況から救われるために
 - 律法を忠実に守ることで神の救いをもたらす
 - ファリサイ派はその先頭に立っていた
 - 一番あってはならないこと
 - ローマに媚びを売ること(徴税人)
 - 罪を犯し続けて、神の怒りを買うこと(罪人)
-

いけにえより憐れみ

- そんな時代に、イエスは徴税人を弟子にし、罪人と食事をした
 - 食事はユダヤ人にとっては同志の証
 - ファリサイ派にとっては許されざる行為であった
 - しかしイエスにとっては、彼らこそ救われるべき存在であった
 - 彼らを裁き、切り捨てるのではなく、彼らを憐れみ、友となることによって悔い改めに導いた
 - イエスは形(いけにえ)より、心(憐れみ)を大切にした
-

憐れみは赦しの源である

- 私たちも神の憐れみによって赦される
 - 「わたしたちも皆、...以前は肉の欲望の赴くままに生活し、肉や心の欲するままに行動していたのであり、...生まれながら神の怒りを受けるべき者でした。しかし、憐れみ豊かな神は、わたしたちをこの上なく愛してくださり、その愛によって、罪のために死んでいたわたしたちをキリストと共に生かし...」 <エフェソ2:3-6>
 - 「互いに親切にし、憐れみの心で接し、神がキリストによってあなたがたを赦してくださったように、赦し合いなさい。」 <4:32>
-

情けは人のためならず

- 正教会では最も大切な祈り
 - 「キリエ・エレイソン」:「主よ憐れみたまえ」
 - 「憐れみ」に最も近い日本語は「情け」
 - 情が厚い・情け深い・薄情・情け容赦ない・同情・情けをこう・情けをかける・情けない・武士の情け・人情・・
 - 赦せない、愛せない、近づきたくもない人に、憐れみの心を持って接するなら、＜神は＞あなたを憐れんで下さる
-